特集1：山車復活で地域おこし

# 宮のにぎわいふたたび！「山車復活プロジェクト」

## 平成26年の菊水祭巡行をめざして

旧新石町 火焔太鼓の山車

❶ 明治42（1909）年巡行写真（宇都宮市教育委員会提供）

**江戸時代、宇都宮の祭りは江戸の天下祭に比肩するほどの賑わいだったことを、ご存知ですか？かつては、80を超える山車や屋台、練り物が繰り出した菊水祭。そんな時代を今につたえる火焔太鼓の山車復活に取り組む「宮のにぎわい　山車復活プロジェクト」について、ご紹介します。**

Utsunomiya × Matsuri

### 宇都宮市所有の豪華、壮麗な「火焔太鼓の山車」

まずは❶の古い写真を見てください。高さ8メートルを超す、壮大な山車の威容に、誰もが圧倒されるのではないでしょうか。これは江戸時代に新石町が建造し、現在、宇都宮市が所有する市民の山車なのです。

近年、「まちおこし」に関連して各地で注目が集まりつつある、「山車」や「屋台」。戦前までは祭りに欠かせないものだったこれらの出し物ですが、高度成長期以降は地方の祭りに登場することは少なくなってきていました。

山車や屋台というと誰もがイメージするのは、華麗な装飾でしょう。祭りの楽しさ、美しさに花を添える精緻（せいち）な彫刻や、鮮やかな色づかい。高々とそびえる威容を飾り立てる提灯。そんな山車が多くの人に曳かれながら練り歩く姿は、日本の祭りを象徴する光景です。

現在でも宮まつりや菊水祭などで、いくつもの山車や屋台を見ることができます。

❷ 明治17（1884）年 県庁新設祝賀之図（宇都宮市教育委員会提供）

けれども、大正時代までは、もっとずっと多くの山車や屋台が、競うように祭りを盛り上げていたのです。

「宮のにぎわい　山車復活プロジェクト」（以下「山車プロジェクト」）会長の檜山幸雄さん（㈱うさぎや会長）は、

「私自身は昭和の生まれですから見たことはないのですが、上の世代の方によると、それはもうすばらしいものだったそうです。記録を調べて見ますと、市内の39の祭礼町から、なんと最盛期には81種類もの山車や屋台その他の出し物が繰り出したようです。さぞ壮麗だったことでしょうね」

記録によると、江戸後期から明治にかけて、菊水祭に登場し市民に愛されてきた山車などの出し物は、大正2年を最後に、ぱったりと消えています。

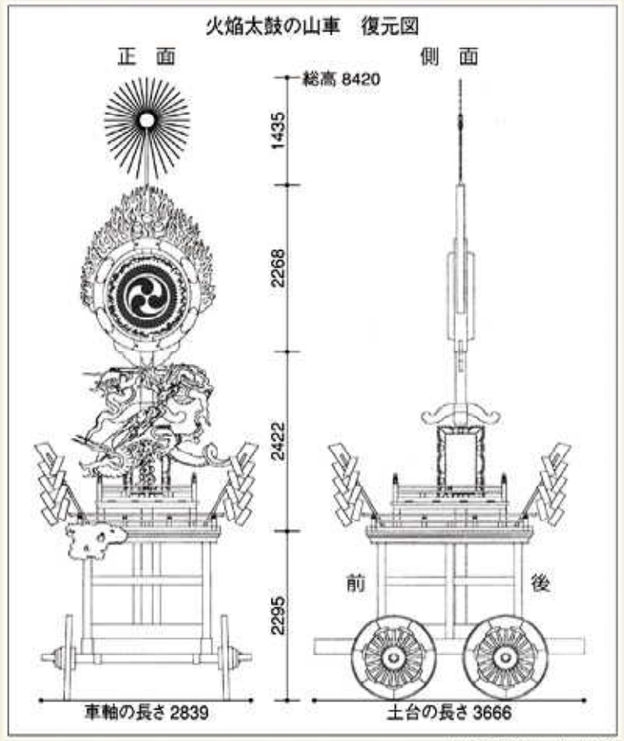
同プロジェクト副会長の藤井昌一さん（藤井産業㈱社長）は、

「大正2年は、大正天皇の御即位を奉祝して行われたもので、その盛大さは空前絶後と絶賛されました。しかし、翌年になると、第一次世界大戦が始まり、世界恐慌へと時代が激動していきます。その後、残念ながら、宇都宮空襲で多くの貴重な文化遺産とともに灰になりました」と残念がります。

往時の壮麗さをうかがわせるのが、前述の❶や、明治17年に県庁竣工祝賀の祭典を記録した絵「県庁新設祝賀之図」（❷）です。新石町だけでなく、宇都宮中の出し物が総出で、盛大に祝った様子が、手に取るようにわかります。

同プロジェクトが復活をめざしているのは、そんな歴史の経過を生き抜いて保存されている、旧新石町（現伝馬町、小幡の一部）の山車なのです。

山車の一部、火焔太鼓の仮展示（宇都宮城址公園まちなか情報館）




火焔太鼓の山車　復元図 ❸

宇都宮城址公園で開催された伝統文化フェスティバルに展示

## まちづくり検討からスタートした復活プロジェクト

残念ながら、新石町の山車は、全部が残っているわけではありません。❶の写真でもっとも目を引く火焔太鼓の部分と、その下の飾りの一部です。

火焔太鼓は、道路拡幅に伴って蔵を取り壊す際に、その中から発見され、昭和55年に宇都宮市に寄贈されました。

同プロジェクトの事務局長である田巻秀樹さん（㈱たまき社長）は、「その時点では、歴史や由来などはあまり分かっていなかったそうです。それが平成23年に専門家による調査を行ったところ、正確な建造年代は不明ですが、江戸時代にさかのぼることができるのは間違いない、大変貴重な文化財であることが判明しました」と言います。

実は、調査のきっかけは、新石町に近接する清住通りのまちづくり事業でした。

平成22年に、市民有志によってスタートした「清住通りまちづくり検討部会」は、2年間で21回もの会合を重ねる中、歴史文化を軸とするまちづくりのアイデアを語り合い、多岐にわたる勉強・調査を行いました。その過程でメンバーから「そういえば、新石町の火焔太鼓を宇都宮市で保存・展示していたのでは」と声があがりました。

検討部会は平成23年5月に報告書を出して活動を終了しましたが、その志を引き継ぐ形で、同年7月に山車プロジェクトが発足。それに先立つ5月～6月に専門家による調査が行われました。

調査に参加した東京藝術大学大学院の荒井経准教授は、「壮大な山車全体の形は失われているものの、火焔太鼓や金龍、華飾りなど主要な部分が管理保存されています。現存している主要部分を取り込んで、山車全体を復元し、宇都宮が歴史ある街であることを示す菊水祭復興のシンボルとして、活用していくことを提案します」と評価しています。

また彫刻師で鹿沼市文化財保護審議委員でもある黒崎孝雄さんも「調査のときに拝見した火焔太鼓の大きさに圧倒され、龍の彫刻の躍動感と迫力に感動を覚えました」と感激を語りながら、

「構造部材は失われているものの、重要な装飾部品のほとんどが保存されています。復元の手がかりになる古写真もありますから、復元は可能です」と断言します。

黒崎さんは、さらに「龍の彫刻の作風から見ると、江戸時代に彫刻屋台や山車の多くを手がけた宇都宮宿馬場の彫刻師高田氏の作では」と推測しています。

毎回議論が白熱する定例会議





## 復元へスタート、新たな時代の山車を

こうした専門家の評価をもとに、山車プロジェクトは活動の方向性を定めます。

◎平成26年の菊水祭巡行をめざす。
◎貴重な文化財である現存部分の調査と修復保存作業を行う。
◎現存部分を取り込み、山車全体の復元をめざす。

❹ 宇都宮を代表する祭りの一つ、菊水祭

「もちろん、山車を単に復元することだけではありません。重要なのはプロジェクト名にもあるとおり、宮のにぎわいです。ややもすると元気が失われがちな昨今、このプロジェクトを通じて『宇都宮にもこんな歴史文化があったのか』と再認識していただき、そこからにぎわいにつなげていきたいという想いが、何より重要なのです」（檜山会長）

とはいえ、過去の山車の全体像は図3の復元図のとおり、高さ8メートル以上、土台の長さは約3メートル半、車軸の長さも約3メートルという巨大なものです。また比較的保存状態がいいと言っても、詳しく調べれば傷みや虫食いなども多く、また失われた土台や車輪など、多くを新たに作らねばなりません。

「資金面では、募金を募ることになります。1口1万円で広く呼びかける活動も始めました」（田巻事務局長）

その他にも、折に触れて行う展示の際に募金箱などを設置し、志を入れていただくことも計画しているとのことです。

（募金の詳細については、記事末の問合せ先にご連絡ください）

## 菊水祭と山車――歴史文化の背景を探る

山車プロジェクト役員であり宇都宮市文化財調査員の池田貞夫さんが、プロジェクトの意義や歴史的背景についてまとめた文章があります。少々長めですが、抜粋して引用します。

### 「菊水祭と新石町の山車について」

宇都宮二荒山神社の祭礼として名高い菊水祭は、延宝元年（1673）に起源を持つと伝えられ、その歴史は330年余を数える。今日でも10月最終の土曜日、日曜日の二日間にわたり、流鏑馬神事や氏子町を一周する鳳輦（ほうれん）（神輿）の渡御が行われている。❹

しかしながら、江戸時代から明治、大正、昭和期の戦前までの菊水祭では、付け祭りとして、町民が主役となった山車や屋台、練り物の繰り出し、手踊り狂言が上演されてきた。この付け祭り（宇都宮の祭礼）は、祭りの規模、出し物の数、氏子らの熱狂ぶり、賑わいにおいて、全国屈指の祭りとして天下に鳴り響き、江戸の天下祭（山王祭・神田祭）と肩を並べるほどであったと伝えられている。（中略）

宇都宮を代表する祭りの一つ、菊水祭

残念ながら、これら隆盛を誇った山車、屋台も、戊辰戦争や宇都宮空襲、更には社会の近代化の流れの中で、焼失、老朽化し、大半の山車、屋台を失った。それでも伝馬町屋台と蓬莱町屋台、本郷町山車は現存しており、今も活躍している。（5 6 7）

一方、江戸時代に起源を持つ山車については、その一部が残存しているものが数台あるが、宇都宮には原型を保っているものは確認されていない。その点から言えば、新石町の山車は構造部材を除いて、火焔太鼓や彫刻、万灯などの装飾部分がほぼ完全な形で残存しており、復元可能な最高級の文化遺産である。

新石町は付け祭りが始まった延宝元年から、すでに「十六番の祭礼町」として祭りに参加している。当時の出し物は人形屋台と記されており、その後、武蔵野の山車や芸屋台、文政年間には踊り屋台を出し、手踊り狂言（清元）を行っている。今に残る火焔太鼓の山車は、祭礼絵巻によると弘化4（1847）年に登場している。その後、明治時代に度々繰り出され、大正2年にも出ている。

新石町の山車は、建造されてから少なくとも160年は経過していると考えられ、江戸時代の宇都宮の町中を練り歩いた山車である。しかも、江戸時代の当時の山車の形式や構造を知る上でも貴重な文化遺産であり、何よりも、隆盛を誇った付け祭りの生き証人でもある。

山車には、宇都宮の先人の祭りにかけた心意気、技、エネルギー、町の結集力が秘められている。その思いを今こそ受け継ぎ、ぜひ山車を甦らせることが、地域の活性化に結びつくと確信する。

5 伝馬町屋台

6 蓬莱町屋台

7 本郷町山車

## すばらしい技術に感嘆、宇都宮のパワーを感じる

このような背景を持つ山車だからこそ、今、多くの市民が復活に期待を寄せているのでしょう。単に一地域の山車復活ではなく、歴史の中の宇都宮を知るよすがであり、江戸（中央）に負けない宇都宮（地方）のパワーの象徴でもあります。

山車プロジェクト役員として修復部会長を務めている、宇都宮市教育委員会委員長である建築家の藤原宏史さん（㈲藤原設計事務所長）は、「関わった当初は、復元はそれほど難しくないと思っていたのですが、調べれば調べるほどその合理的な考え方に感心しました。本来、山車や屋台は引いて練り歩くもので、動いてはいけない建築物とはまったく違った発想による高度な技術が使われています。技術の伝承、歴史文化の伝承という意味でも、腰をすえてやらなくてはいけないと、今では考えています」

そういった高度な技術は、それだけで存在するものではありません。技術をマスターできる環境として、一定数以上の技術者集団の存在や、彼らに仕事を発注する依頼人が不可欠です。さらに、外部からの技術交流も重要ですから、交通の便も良くなくてはいけません。

「町全体の総合力がなければ、高度な文化や技術は維持できない。ですから、こうした山車が残っているということは、それだけ宇都宮がすばらしい町であったという、証明なのです」（藤原部会長）

完成予想の組み立てキット

## 夢の実現に、力をあわせて取り組んでいく

さて、山車プロジェクトは平成23年7月25日に設立総会を行った後、修復のための調査活動と、市民への周知を行ってきました。

今年度も、イベント等の機会をとらえて、積極的に展示を行い、市民に周知していく予定ということです。

◎平成24年8月4日
第37回ふるさと宮まつり
（うつのみや表参道スクエア）
◎同　10月下旬
菊水祭
◎同　11月上旬
オリオン通り商店街振イベント

また、平成20年に解体された二荒山神社の旧鳥居の寄贈を受け、修復材料として使用することも決定。6月に搬出が行われました。

平成23年10月29日のベストフェスターin西武展示

「山車の床材や山車部材の収納箱などに使用する予定で、準備を進めています」（藤原部会長）

「昭和21年に建てられ、約60年間宇都宮のシンボルである二荒山神社の顔として、市民に親しまれてきた鳥居です。助川宮司からお話をいただいた時には、本当に嬉しかったですね」（田巻事務局長）

これにより、一層「市民にとって身近な存在」になることは間違いないでしょう。

「まだ道のりは遠いですが、一歩一歩着実に進めていきたいと思います。さまざまな方にご協力をお願いし、なんとしても実現させたいですね。『新石町』という狭い地域のことではなく、宇都宮の歴史文化を象徴するプロジェクトとして、まちのにぎわい再生の起爆剤として、メンバーが一丸となってがんばりますので、ぜひ皆さまのお力添えをお願いします」（藤井副会長）

「新石町は、江戸時代までの宇都宮にとっては、本陣などもあり、町人文化の中心地だったのです。街道が分岐する追分であり、交通の要所でもありました。ですからここにもう一度スポットを当て、いわば『追分ルネッサンス』として盛り上げることが、宇都宮全体の活力アップに貢献できることだと思います。山車はそのシンボルです。ぜひみんなで力を合わせ、菊水祭での巡行を実現させたいと思います」（檜山会長）

単なる一地域、一文化財の枠を超えて、宇都宮全体の活性化に寄与するポテンシャルを持つ山車プロジェクト。これが成功すれば、この成功体験を起爆剤として、さらに大きな「宮のにぎわい」が実現できるかも知れません。そんな夢を与えてくれる、素敵なプロジェクトではないでしょうか。

◎取材協力
宮のにぎわい　山車復活プロジェクト
会長　檜山　幸雄さん（㈱うさぎや会長）
副会長　藤井　昌一さん（藤井産業㈱社長）
修復部会長　藤原　宏史さん
（㈲藤原設計事務所長）
荒井　縦さん（東京藝術大学大学院准教授）
黒崎　孝雄さん（彫刻師）
池田　貞夫さん（宇都宮市文化財調査員）
事務局長　田巻秀樹さん（㈱たまき社長）

問合せ／ 宮のにぎわい 山車復活プロジェクト事務局　☎634-6810（㈱うさぎや内）　e-mail usagiya@sun.ucatv.ne.jp

Utsunomiya×Matsuri